

教員志望学生が教育ボランティア活動に取り組むことの教育的価値

Educational Value of Participating Educational Volunteer Activities
by Students who want Become Teachers

嶋田 一彦*

SHIMADA Kazuhiko

要約：本研究の目的は、教員を志望する学生が教育ボランティア活動に取り組むことの教育的価値を、「学生にとっての教育的価値」「受入先にとっての教育的価値」の2つの視点から明らかにすることである。教育ボランティア活動を行う学生、受入先の両者を実施した質問紙調査の回答をデータとし、データ分析には、KJ法を用いた。その結果、前者の視点については、19のカテゴリーが得られ、それらは7つの教育的価値にまとめられた。後者の視点については、10のカテゴリーが得られ、それらは4つの教育的価値にまとめられた。さらに、それぞれの教育的価値の構造モデルを生成し、教育的価値間の相互関係を明らかにした。また、受入先には、「後輩教員を養成する役割を受けもつ」という面から教育的価値を見いだしている部分があること、教育ボランティアの活動内容の違いは、「学生にとっての教育的価値」に対する考えに大きな影響を与えないということが示唆された。

キーワード：教育ボランティア活動、教育的価値、教員志望学生

I 問題と目的

1 スクールボランティア活動の意義と必要性

現在、多くの教員養成学部では、教員志望学生の実践的指導力の向上を図るため、学生が、教育実習以外に、教育現場におけるボランティア（スクールボランティア）活動に主体的に参加できる機会を設けている。最初に、この活動の意義と必要性に触れる。

まず、意義について、1996年の第15期中央教育審議会第一次答申は、「閉鎖的となりがちな学校に、外部の新しい発想や教育力を取り入れることにより、教員の意識改革や学校運営の改善を促すことも期待される」と、1997年の文部省「教育改革プログラムについて」は、「学生のボランティア活動は、大学教育に地域社会の教育力を活用できるとともに、大学が地域社会に貢献できるという教育的意義を有する」とそれぞれ述べている。この活動は、学生、スクールボランティア活動の受入先（以下「受入先」）の両者にとって意義があるものと捉えられている。

また、必要性について、前述の答申は、「実践的な指導力を培うため、教員の養成、採用、研修の各段階を通じての施策の一層の充実を図る必要がある」と、1999年の教育職員養成審議会第三次答申は、「教員を希望する学生が日常的に学校現場を体験できるような学校の受入れ体制を整備する必要がある」と提言している。これらの提言が政策として具体的な形となったものが、1998年の文部省「教員養成系大学学部フレンドシップ事業」であり、2003年の文部科学省「放課後学習チューターの配置等に係る調査研究事業」である。これらの政策と、教育現場における学力向上や人員拡充の願いが合致したことにより、スクールボランティア活動は急速に拡大していった。

* 大学院教育学研究科教育実践創成専攻

さらに、最近では、2011年の文部科学省中央教育審議会教員の資質能力向上特別部会が審議経過報告で、「教員養成の改革の方向性」の一つとして、「教員養成の初期の段階における、学校支援地域本部等でのボランティア活動の充実」と「その際、活動の成果を積極的に単位として認定すること」の検討を提言するなど、スクールボランティア活動に対する必要性は益々高まりを見せている。

2 本学における教育ボランティア活動の経緯と課題

本学では、いわゆるスクールボランティア活動を「教育ボランティア活動」と名付けている。本学における教育ボランティア活動のここまでの経緯を振り返ってみる。

本学教育人間科学部は、2003年3月に教職に就くことを希望する学生の実践的力形成のために、教育現場でのボランティア活動を支援する教育ボランティア委員会を立ち上げた。同時期に、文部科学省の委嘱を受けた山梨県教育委員会から、「放課後学生チューター」の派遣依頼が本学にあり、教育ボランティア委員会は、これを学生によるボランティア活動の一環として位置づけ、A市内の4小中学校に学生を派遣した。「放課後学生チューター」の派遣は2004年度まで続いた。受入先のこの制度や学生への評価は高く、また学生からも「学校現場を知るよい機会になった」「教えることについての楽しさや厳しさを学んだ」などの感想が得られ、さらには、教職への意志を固める機会になった旨の声も寄せられた（進藤・勢田・澤登・角田，2009）。この当時の活動は、実際の教育現場における指導者不足を解消し、きめ細かな指導を実現することによって小中学生の学力向上を推進するという国および県の方針に沿うものであり、そこでは、教育人間科学部による直接的な地域貢献という一面が強調されていた。

2005年度からは、「放課後学生チューター事業」を引き継ぐ形で、教育ボランティア委員会が中心となり、「教育ボランティア活動」として新たにスタートした。この活動のねらいは、学生による小中学校での学習指導等を通じて、児童生徒の学力を向上させるとともに、教職を目指す学生の学びを深めるというものである。

現在では、A市以外の広範な地域において、学校を始めとした多くの教育機関からのボランティア派遣の要請に応じており、活動内容も、学習指導補助だけでなく、学校行事・部活動の指導補助、障害のある児童生徒の支援、不登校児童生徒の支援など幅広いものとなっている。また、この教育ボランティア活動は社会参加実習として単位化されている。こうした活動の範囲と幅の広がりや単位化を背景にして、実質活動学生数、受入先数、単位取得者数は毎年着実に増加している（表1）。さらに、2010年度には学生運営委員会を組織し、学生主体の企画運営に計画的に取り組んできた。

表1 教育ボランティアの実績の推移

	2005年度	2006年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度
実質活動学生数	79	128	99	160	231	281
受入先数	14	12	19	30	35	62
単位取得者数	60	93	74	121	176	223

こうして、現在までの活動を振り返ると、2010年度の受入先数、実質活動者数が過去最高を記録したように、確かに量的な面では成果を上げてきたと言える。しかし、これから本当に目を向けなければならないのは、質的な面での向上である。質的な面での課題は二つある。

一つは、教育ボランティア活動は、受入先に利益を与えるだけでなく、学生も与えられているという両面の理解が不十分なことである。実際に、学生運営委員会主催の「教育ボランティア学生交流会」への参加者が極めて少ない、無責任にも活動を無断で欠席する学生が複数存在する、といっ

た状況が見られた。こうした状況の背景には、「ボランティア」のもつ「自発的」「無償」という特徴から、この活動は「やってあげている」ものだという意識が働いているということが容易に想像できる。この意識は、教育ボランティア活動の受益者は受入先であり、学生にはそれほどの利益はないという考えに通じていると考える。ある受入先の小学校長が「学生を育てるという意識で受け入れている」と話していたことから分かるように、学生は、教育ボランティア活動を通して、教育実習とは異なる学びを得て、新たな自己を形成して成長するのであり、けっして相手に何かを与えるだけの存在ではないのである。このことへの理解を深めることが非常に大切である。

もう一つは、教育ボランティアの意義と内容及び教育効果についての受入先の内部での共通理解が不十分であり、受入先と学生両者のニーズや考えが必ずしも一致していないという課題である。このことについては、「学校にいったけれど、担当以外の先生は誰が何をしに来たのかという対応だった」「教室の後ろにただ立っているだけで、何をしたらよいのか分からなかったし、先生からの指示もなかった」「活動の打ち合わせに行ったが、その教科は必要ないと言われたため、活動をしていない」という学生の声に象徴されている。

以上の課題の解決に向けては、学生・受入先の両者が考える「教育ボランティア活動の教育的価値」を明らかにすることを通して、教育ボランティア活動の本来的な意義を互いに理解し合うことが必要不可欠な条件となってくる。

3 先行研究の概観と本研究の目的

姫野（2006）は、学校ボランティアに関する研究を、1）カリキュラム開発に関する研究、2）学生への学習効果の検討、3）大学側の支援モデルの開発、に分類したが、ここでは、2）にかかわる先行研究を概観してみる。

松浦（2003）は、中学校におけるスクールボランティア活動のケーススタディーによって、学生に形成される教育的実践力を考察した。姫野（2006）は、授業補助（チーム・ティーチング）がある活動の場合と放課後の学習相談のみの場合の学習効果の違いを明らかにした。また、原・芦原（2006）は、教職志望者に対して、教育実習後のスクールボランティア活動の有無による、教師志望度・教職に対する意識・教員採用試験の可否に与える影響について調査した。これらは、学校以外の教育の場におけるボランティア活動を対象としておらず、スクールボランティアの受入先が考える教育的価値の内容には言及していない。

阪根（2006）は、香川県下の全小中学校に対して、学生ボランティアの活用の有無・学生ボランティアを活用する理由・学校としての活動状況の満足度などを調査し、学校が考える学生ボランティアの成果に言及しているが、質的な視座によってまとめられてはいない。また、進藤・勢田・澤登・角田（2009）は、教育ボランティアの受入先に対して、教育ボランティアの効果の有無について4件法で調査を行ったが、教育的価値の内容面にまでは踏み込んでいない。

また、武田・村瀬（2009）は、スクールボランティアについてのそれまでの実践研究を包括的にレビューし、質的・量的視座に基づいた検証の不十分さを課題としてあげている。

そこで、本研究では、教育ボランティアに参加した学生と、その受入先に対して、自由記述の質問紙調査を実施し、結果を分析することで、「教員志望学生が教育ボランティア活動に取り組むことの教育的価値」を、「学生にとっての教育的価値」「受入先にとっての教育的価値」の二つの視点から明らかにすることを目的とする。

II 方法

1 調査時期

2010年12月

2 調査対象者

〔学 生〕2010年度に本学の教育ボランティア活動を行った学生・大学院生281名の内、アンケートに回答のあった88名。学年と活動形態の内訳を表2に示す。

〔受入先〕2010年度、本学の教育ボランティア活動の受入先62機関の内、年間を通して教育ボランティアを活用した19機関の担当者。内訳は、学校関係17（教育委員会3、幼稚園1、小学校8、中学校4、特別支援学校1）、学校関係以外2（児童養護施設・発達障害者支援センター各1）である。

表2 学生対象者の学年と活動形態の内訳

	人数	学校における授業中の活動		学校における授業以外の活動		学校以外の場での活動	
		あり	なし	あり	なし	あり	なし
1 年 次	10	2	8	5	5	5	5
2 年 次	18	9	9	10	8	5	13
3 年 次	39	27	12	19	20	20	19
4 年 次	19	18	1	10	9	1	18
大学院1年	2	2	0	1	1	0	2
合 計	88	58	30	45	43	31	57

3 データ収集手続き

学生、受入先の両者に対して、質問紙調査を実施した。学生に対しては、教育ボランティア学生運営委員を通じて配付・回収し、受入先に対しては、メールによって調査用紙を配付・回収した。

学生に対する質問項目は、「教育実習経験の有無」「活動参加の動機」「活動内容」「活動を通しての学びや気づき」「活動を通して教職に就くにあたっての課題と感じたこと」「今後の活動への参加希望」の6項目である。一方、受入先に対する質問項目は、「募集動機」「教育ボランティア活動の教育的価値」「活動をする学生に期待すること」の3項目である。これらのうち、本研究では、「教育ボランティア活動の教育的価値」に視点をあてるため、この視点にかかわる自由記述質問だけをとり上げ、それに対する回答を分析することとした。取り上げた質問は表3のとおりである。

表3 教育的価値にかかわる質問項目（自由記述）

学 生	教育ボランティア活動をして、学んだこと、気づいたことは何ですか。
受入先	教育ボランティア活動の「教育的価値」はどのような点にあるとお考えか、受入先にとってと、学生にとっての両面でお書きください。

4 分析方法

分析にあたっては、次の方法をとった。

- 1) 回答内容からキーワードを抽出し、キーワードを含む文を1つの単位とし、1枚のカードに記述し直した。1文の中に2つ以上の内容が含まれている場合は、別のもので考え、2枚以上のカードに分けて記述した。

さらに、学生の回答と、受入先が考える学生にとっての教育的価値に関する回答のカードで1グループ、受入先にとっての教育的価値に関する回答のカードで1グループを構成した。

- 2) 1) のグループごとに、カードを内容の類似性に基づいてKJ法(川喜多 1967)によって整理・分類し、カテゴリーを生成した。その後、カテゴリー同士を比較し、対象や段階といった関係性を視点として教育的価値を整理した。

なお、この過程は、学生自身の考えを反映させるため、教員に加えて、教育ボランティア活動の当事者でもある学生運営委員会正副委員長の参加を得て行った。

- 3) 各カテゴリー内容へ言及した人数を度数として、学生と受入先の違い及び活動内容の違いによって分類したクロス集計表を作成した。

続けて、それぞれの違いによって、各カテゴリー内容へ言及した度数に差があるかどうかをFisherの直接確率計算法で検定した。

- 4) 教育ボランティア活動による教育的価値の間の相互関係を示す構造モデルを生成した。

III 結果と考察

1 学生にとっての教育的価値

(1) 抽出したカテゴリーの説明

教育ボランティア活動の学生にとっての教育的価値を明らかにするため、学生の回答と、受入先が考える学生にとっての教育的価値に関する回答をKJ法によって分類した結果、19のカテゴリーが得られ、それらを7つの教育的価値に整理した。表4に、その結果を示した。

以下、7つの教育的価値と各カテゴリーについて説明する。

なお、今後、【 】内は教育的価値名を、〔 〕内はカテゴリー名を表すものとする。また、各カテゴリーの説明の最後には代表的な回答例を「 」内に示した。1(1)及び後述する1(3)における回答例の後ろの()内は、学生または受入先のいずれの回答であるかを表している。

【教育ボランティアの独自性】

〔教育実習との違い〕〔教育実習とのかかわり〕といった、教育ボランティア活動がもつ独自の性格にかかわる価値をまとめて、【教育ボランティアの独自性】とした。

〔教育実習との違い〕：教育ボランティア活動は、教育実習とは異なり、評価を伴わないので、精神的なゆとりをもって活動に取り組むことができる。また、半年間あるいは1年間という比較的長期にわたり、教育現場とかがわれる。これらのことが、子どもや教職員の生の姿を客観的に捉えたり、教育現場の雰囲気を感じたりできることにつながっていくのである。このカテゴリーには、特に受入先からの言及が多いのも特徴である。

「実習時のような、指導案づくりや日々の実習記録に追われることなく、よい意味でゆとりを持って児童生徒と接することができる(受)」

〔教育実習とのかかわり〕：このまま現場に出てもよいのだろうかという教育実習の前に抱える不安の解消、教育実習の前に現場の様子を知っておきたいという願い、これらに教育ボランティア活動は応えてくれる。教育実習に意欲的に取り組む姿勢をつくることに対して効果が得られるのである。また、教育実習後も長期的に学校にかかわることで、教育実習では気づけなかった部分や子どもの成長を見続けることができるという効果もある。

「教えることが思っているよりも難しかった。でも、実際に子どもと関わることができて、実習に向けていい勉強になった(学)」

【子どもの理解】

〔つまずきポイントの理解〕〔子どもの実態把握〕〔子どもの個人差への気づき〕〔家庭環境という視点への気づき〕といった、子どもを対象とした理解や気づきをまとめて、【子どもの理解】とした。

〔つまずきポイントの理解〕：適切な学習指導をするためには、子どもがどこで、どのようにつまずくのかを把握することが大切であるのは言うまでもない。ティーム・ティーチングや自主学習の補助といった活動で、一人ひとりの子どもに対応することを通して、つまずきのポイントを把握しやすいのである。

「子どもが今何につまずいているのか、何を考えているのかを感じ取ることは、子どもと接する中でしか得られないもので、貴重な体験であると思っている（学）」

〔子どもの実態把握〕：教員志望学生の多くは、自分なり子ども像をもっているであろう。ところが、実際の教育現場に出てみると、それまで考えていた子ども像と違う姿を発見する。それは驚きでもあり、喜びでもあり、自己の教育観や指導観といったものの転換を迫られることかもしれない。しかし、将来的に教師を目指す者にとっては大変貴重な経験となるのは間違いないのである。

「授業中、歩き回る児童を初めて見た。そして、そういう児童が（低学年では）多くいることを知った（学）」「子どもたちの実態について、見たり対応したりする中で学べたことは本当に良かったと思う（学）」

〔子どもの個人差への気づき〕：教育ボランティア活動では、特定の学年・学級ではなく、複数の学年・学級の指導にかかわることが多い。また、特別支援学校や児童養護施設など、通常では触れることができない教育現場へも行くことができる。そうした経験を通して、一口に子どもと言っても、その性格や個性、社会性などは様々であることを実感し、教師としては、そうした個人差に応じた指導が必要であるが、実際は非常に難しいということに気づくのである。この気づきが学習指導・生活指導において、重要な要素となるのである。

「子どもは一人一人異なっていて、目の前の子どもと向き合う時はその子自身をよく見て、感じて、接していかなければいけないのだと学んだ（学）」

〔家庭環境という視点への気づき〕：子どもを指導するときに、その子どもの背景にある家庭環境まで意識して、指導面で配慮する学生は、ほとんどいないのではないだろうか。意識する以前に、そうした要素があること自体に気づかないのかもしれない。そのことを考えると、家庭環境という新たな視点を得るということには意味がある。

「母子家庭の児童・難聴の児童がいました。…〈略〉…、そんな立場にある知人・友人がいたな、と思い出しました。そしてその立場から端を発したいじめのことも。様々な児童がいるという当たり前のことを再確認し、身の引き締まる思いがしました（学）」「児童養護施設は一生のうちで関わるものがほぼなく、一般の家庭で生活している子ども達ばかりでなく、様々な家庭環境が背景にある子ども達への理解が少しは深まる（受）」

【教育現場の理解】

〔教育現場の理解〕：教育実習では、教科指導、学級経営が主であり、学校の組織や運営に目を向けることは少ないであろう。教育ボランティア活動では、今まで目を向けることができなかったものを見ることができ、広い視野で教育現場やそこで行われる教育の全体像について理解できるのである。これは理解する対象が組織体ということで、単独の価値とした。

「算数、数学に関しては特に、児童・生徒40人に対して教師一人では、全体を把握することが厳しく、できる限り補助する教員が入っていないと難しい状況である（学）」「学校教育を正しく理解する具体的場面に出会うことができる（受）」

【教師の仕事の理解】

〔多忙さ・大変さ〕〔多様性〕〔教育観・専門性〕といった、教師という仕事を対象とした理解をまとめて、【教師の仕事の理解】とした。

〔多忙さ・大変さ〕：学生は、運動会などの行事を実施することの大変さや業務の多さと忙しさに気づくのである。中には、大変さを乗り越えて行事をやりきった感動や、多忙な状況でも心に余裕が必要であることをあげた前向きな回答もある。

「教師は授業外に雑務や生徒の管理などがありとても多忙である（学）」「小学生は元気。とにかく低学年は体を動かすことが大好きなので、休み時間は体力勝負である（学）」

〔多様性〕：教師には教えるという仕事以外にも様々な仕事があることを理解できるということは、職業としての教員を深く理解する上で大切である。

「学校では見られなかった先生方の、行事に際しての仕事の様子が見られ、多様な教師の仕事の一面を学んでくることができた（学）」

〔教育観・専門性〕：教師のもつ教育観に触れるだけでなく、教師に自分の悩みを相談することもでき、それらを通して、自己の教育観が少しずつ形成されていく。また、実際の指導場面に直面することで、教科における専門性だけでなく、生徒指導における専門的知識の大切さも実感できるのである。

「先生方の教育観、生徒との接し方などについていろいろ話し合えたため、非常に参考になった（学）」「教科指導には専門性が、生徒指導には児童理解が不可欠であることを実感できる（受）」

【学習指導】

〔授業の仕方・指導法〕〔情意面の伸長〕といった、学習指導にかかわるものをまとめて、【学習指導】とした。

〔授業の仕方・指導法〕：複数の学年・学級の指導にかかわることで、成長段階に応じた指導法を理解したり、教師の違いによる指導法の違いに気づいたり、学習環境を整備することの重要性に気づいたり、学習指導面に関して学べることは非常に多い。回答からは、分かりやすく、効果的な指導法を少しでも身につけ、将来に活かしたいという、学生の思いが強く感じられる。

「どう教えたらわかりやすいのか考えるようになったことは、活動を始める前にはなかったことだと思います（学）」「自分の知らない指導法を知ることができた（学）」「将来、教員を目指している学生にとっては、指導方法、支援のしかた等勉強になると思う（受）」

〔情意面の伸長〕：子どもの興味や関心・意欲が学習のベースにあり、それらの高まりが効果的な学びに結びつくことや、やる気にさせることの難しさに気づくことができるのである。

「子どもたちの興味、関心、意欲を伸ばす手助けをするのが教師の役目である。ただ知識を子どもたちに身につけさせることが主な仕事であると思っていたが、その考えは大きく間違っているということに気づいた（学）」

【生徒指導】

〔具体的な生徒指導場面における対応〕〔子どもとの接し方〕〔言語的なかわり〕〔信頼関係づくり〕といった、生徒指導にかかわるものをまとめて、【生徒指導】とした。

〔具体的な生徒指導場面における対応〕：教育現場における様々な指導場面で、教師が具体的にどのような指導や対処をするかを間近で見られることは、学生にとって貴重な経験である。特に、生徒指導の場面では、臨機応変な対応が求められることが多く、より大きな学びとなる。

「児童間のトラブルが起きたときの対応の仕方が分かった（学）」

〔子どもとの接し方〕：学生は、小学生と中学生の差による接し方の違いに難しさを感じたり、子どもとのコミュニケーションの大切さを意識したりしている。教師の子どもへの対応の仕方を見て、子どもとの接し方や距離の取り方を知ること、コミュニケーションをとることの重要性を理解できることには意味がある。

「子どもは身体的にも精神的にも私たち大人とは全然違うため、そこに気を遣って接していく必要があると感じた（学）」「日頃からたくさんコミュニケーションをとることが現場では欠かせないと感じた（学）」

〔言語的なかわり〕：子どもの考えを引き出したり、意欲を向上させたりするために、どのような言葉かけや褒め方をするのがよいかは、学生にとって難しい問題である。また、子どもを叱ることの難しさも感じている。そうした、子どもに対する言語的なかわりの重要性や具体的な方法を理解できることに価値がある。

「ほめることの大切さも実感した。字が普段よりうまく書けたり、計算がはやくできたりしたときに、少しでもほめてあげると子どもたちのやる気が倍増するような気がした（学）」

〔信頼関係づくり〕：教師の指導を子どもが素直に受け入れ、子どもも自分の考えを言えるようになるためには、両者の間に信頼関係が築かれていることが必須の条件であると言ってよい。教育ボランティア活動は、そのことに気づかせてくれるのである。

「先生から積極的に話しかけて、子どもの緊張をほぐして、子どもからも話しかけられるような、良好な関係作りをすること（学）」

【学生の教師としての育ち】

〔自己の振り返り〕〔資質能力の向上〕〔将来展望〕といった、学生が自分自身に目を向け、成長していく段階に焦点をあてたものをまとめて、【学生の教師としての育ち】とした。

〔自己の振り返り〕：今の状態のままで教師になることがよいのか、自分は教師への適性があるのか、学生は多かれ少なかれ、そうした不安を感じている。この活動を通して、自己を振り返ることで、教職に就くにあたり、自分に足りない部分を発見し、さらには、それを克服しようとする姿勢を身につけられるのである。

「自らの教えることに対する課題等を感じることもできたし、また、現職の先生方の姿から学ぶことは多かった（学）」「人間的にもしっかりとした態度を教師は身につけなければいけないと思った（学）」

〔資質能力の向上〕：大学の講義を通して理論を学んだ学生が、その理論を実際の教育現場での実践と結びつけることで、教師としての資質能力の向上を図ることができる。教育ボランティア活動は、それができる貴重な機会となっている。

「大学の講義だけでは得られないような、現実的な対応を経験することで、教師としての資質を向上させることができる（受）」

〔将来展望〕：教育現場での実践経験を積むことで、教師として教壇に立ったときの自分をイメージできたり、現場の教師の中に、理想の教師像を発見できたりと、将来の展望を開くことにつながられることも重要である。また、教育ボランティア活動を通して教師になるという意志をより強く固めることができるということも見逃せない要素である。

「本当に先生ができるか不安になったが、逆に生徒・児童と触れあう中で絶対に先生になりたいという思いが強くなった（学）」「教員など専門家を目指す学生にとって、教育ボランティア活動の実験体験は将来のイメージを持つことが可能となり、人材育成につながる（受）」

表4 教育ボランティア活動の学生にとっての教育的価値

カテゴリーの内容説明	学生にとっての教育的価値	
評価を伴わないので、ゆとりと適度な距離感をもつことができ、しかも定期的に子どもと触れ合うことができるという点で、教育実習とは異なり、そのことによって、教育現場や子どもの実態をよりよく把握できる。	教育実習との違い	教育ボランティアの独自性
教育実習の前に活動を行うことで、教育実習に向かう心構えができた、実習後も長期的にかかわることで教育実習では気づけなかった点に気づいたりできる。	教育実習とのかわり	
学習面で子どもがつまずきやすいところや陥りやすい間違いが理解できる。	つまずきポイントの理解	子どもの理解
子どもの生活行動面の実態、それまで考えていた子ども像とのギャップ、子どものもつ純粋さ・エネルギーの大きさなど、生の姿を理解できる。	子どもの実態把握	
様々な個性をもった子どもの存在と、それへ対応することの必要性和難しさに気づくことができる。	子どもの個人差への気づき	
子どもの指導にあたっては、背景にある家庭環境にまで目を向ける必要があることに気づくことができる。	家庭環境という視点への気づき	教育現場の理解
教育現場の組織や運営、学校教育全体について理解できる。	教育現場の理解	
教師の日常の姿を見ることで、多忙さと大変さを理解できる。	多忙さ・大変さ	教師の仕事の理解
授業をすること以外にも、教師には様々な仕事があることを理解できる。	多様性	
教師との交流をとおして、その教師のもつ教育観に触れることができる。実際の指導場面に直面して、指導における専門性の重要性を実感できる。	教育観・専門性	
具体的に授業の展開の仕方や子どもへの対応の仕方を学んだり、自分なりに考えたりできる。指導の工夫や知らない指導法を知ることができる。	授業の仕方・指導法	学習指導
子どもの興味や関心・意欲を高めることの重要性に気づくことができる。	情意面の伸長	
子ども同士のトラブル、清掃や給食といった具体的な状況や場面について、対処の仕方、指導の仕方を学ぶことができる。	具体的な生徒指導場面における対応	生徒指導
教師の子どもへの対応の仕方を見て、子どもとの接し方を学んだり、コミュニケーションをとることの重要性を理解できたりする。	子どもとの接し方	
子どもへの言葉のかけ方、褒め方・叱り方の難しさや大切さなど、子どもに対する言語的なかわりの重要性が理解できる。	言語的なかわり	
子どもとの良好な信頼関係を築くことの大切さに気づくことができる。	信頼関係づくり	
教師になるにあたって自己の課題や未熟さに気づき、それを意欲的に解決していこうという意識をもつことができる。	自己の振り返り	学生の教師としての育ち
大学における理論と教育現場での活動を結びつけることで、教師としての資質能力の向上を図れる。	資質能力の向上	
教師としての自分の将来像を描くことができたり、教師になるという意志をより強く固めることができたりする。	将来展望	

(2) 学生と受入先の比較及び活動内容の比較による差異

ここでは、学生と受入先の違い及び教育ボランティアの活動内容の違いが、学生にとっての教育的価値に対する考えにどのように影響するかについて検討する。

①学生と受入先の比較による差異

まず、学生と受入先とは、教育的価値についての考えにどのような違いがあるのか検討する。各カテゴリー内容へ言及した人数を度数として、学生と受入先の違いによって分類し、クロス集計した結果を表5に示す。

表5 学生と受入先の違いによるクロス集計表（人）

学生にとっての教育的価値		学 生	受入先
教育ボランティアの独自性	教育実習との違い	1	6
	教育実習とのかかわり	3	1
子どもの理解	つまずきポイントの理解	6	0
	子どもの実態把握	23	6
	子どもの個人差への気づき	14	1
	家庭環境という視点への気づき	2	1
教育現場の理解	教育現場の理解	5	3
教師の仕事の理解	多忙さ・大変さ	5	0
	多様性	3	0
	教育観・専門性	1	3
学習指導	授業の仕方・指導法	28	3
	情意面の伸長	6	0
生徒指導	具体的な生徒指導場面における対応	3	0
	子どもとの接し方	20	2
	言語的なかかわり	8	0
	信頼関係づくり	3	0
学生の教師としての育ち	資質能力の向上	0	3
	自己の振り返り	9	2
	将来展望	3	5

※サンプルサイズは、学生 88、受入先 19 である。

検討は、各カテゴリー内容に言及した人数の割合に、「学生」と「受入先」の両群で差があるかどうかを Fisher の直接確率計算法（両側検定）によって検定し、その結果に基づいて行った。

検定結果で、有意な差が見られたカテゴリーは、〔教育実習との違い〕〔教育観・専門性〕〔資質能力の向上〕〔将来展望〕の 4 カテゴリーであり、Fisher の直接確率計算法による p 値は、それぞれ、 $p=9.35E-5$ 、 $p=0.017$ 、 $p=0.005$ 、 $p=0.004$ （SPSS による出力結果）であった。他のものについては、有意な差は見られなかった。

〔教育実習との違い〕については、受入先が最多の 6 名が挙げたカテゴリーの一つであったのに対し、学生で挙げた者は 1 名のみであった。学生にとっては、教育実習にしる、教育ボランティア活動にしる、子どもや教職員と直接触れ合うということで、大変緊張することに違いはない。それに対して受入先は、教育ボランティア活動について、評価がされない、実習記録を書かなくてよいことなどから、肩に力を入れずリラックスして活動できる点が教育実習とは異なると考えている。そうした状況の中では、生の学校や子どもの様子を把握しやすく、そこに価値があると捉えている。

〔教育観・専門性〕について言及したのは、学生は 1 名のみ、受入先は 3 名であった。教育ボラ

ンティア活動終了後に、学生が現場の教職員と話す機会というのは極めて少ないのが現状である。したがって、教師のもつ教育観に触れることは難しいであろう。しかし、受入先からは「実際に子どもとかかわる中で悩んだことを、現場の教師に相談できる」という回答もあることから、学生と教職員が交流し、ボランティア活動を振り返る機会を意図的に設けることができれば、活動の効果はより高まるものと期待できる。

〔資質能力の向上〕について言及した者は、受入先の3名のみで、学生にはいなかった。学生は、「実践的な指導力」という目の前にあるものは意識しても、それを包含する「教師としての資質能力」という、より大きなものにまでは意識が向かないのではないだろうか。一方、受入先は、「教師としての資質能力」の向上は、教員養成の段階から必要なものであると考え、教育ボランティア活動が大切な機会であると捉えているものと推察できる。

〔将来展望〕については、学生3名、受入先5名と、割合からすると、受入先がより多く言及している。受入先の中には、将来教師を志望している学生ということで、研修や校内研究に参加する機会を与えているところもある。そうした経験を通して、学生が職業としての教師について具体的なイメージを描き、教師への適性を見極めたり、教職へ就くという思いを強めたりすることに、受入先は価値を見いだしていると考えられる。受入先の「将来のイメージを持つことが可能となり、人材育成につながる」や「将来の職業の選択肢の一つとして教師という職業の見本を見ることができ」という回答に、そのことが表出されている。

以上、学生と受入先との教育的価値についての考えに有意な差があったカテゴリーでは、いずれも受入先の回答割合が高かった。それらのカテゴリーを総括的に捉えてみると、受入先には「教員養成の役割を受けもつ」という視点が存在しているものと解釈できる。教育ボランティア活動は、人員増加で教育的効果をあげるという側面が確かに大きい。だが、教師としての後輩を育てるという意識をもっている受入先が多いのも事実である。学生には、教育ボランティア活動は教師としての自己を形成していく一過程になるのだということの理解を深めさせる必要があるだろう。

②活動内容の比較による差異

次に、教育ボランティアの活動内容の違いによって、学生自身の考えにどのような違いがあるのか検討する。各カテゴリー内容へ言及した学生の人数を度数として、活動内容の違いによって分類し、クロス集計した結果を表6に示す。

検討は、各カテゴリー内容に言及した人数の割合に、活動内容の違いによって差があるかどうかをFisherの直接確率計算法（両側検定）によって検定し、その結果に基づいて行った。

「学校における活動あり」「学校における活動なし」の2群に分けたときに、有意な差が見られたカテゴリーは、〔授業の仕方・指導法〕のみであった。このカテゴリーについては、「学校における活動あり」が26人、「学校における活動なし」が2人であり、 $p=0.046$ であった。「学校における活動なし」群では、授業に直接かかわることがないので、この差が出るのは当然の結果であると言える。この2群について、他のカテゴリーにおいては、有意な差は見られなかった。

また、「学校における活動あり」群を、さらに授業中の活動の有無によって分けたとき、すべてのカテゴリーにおいて、有意な差は見られなかった。

これらのことは、活動内容の違いは、「学生にとっての教育的価値」に対する考えに大きな影響を与えないということを示唆している。

表6 活動内容の違いによるクロス集計表（人）

学生にとっての教育的価値		学校における活動あり		学校における活動なし
		授業中の活動あり	授業中の活動なし	
教育ボランティアの独自性	教育実習との違い	1	0	0
	教育実習とのかかわり	3	0	0
子どもの理解	つまずきポイントの理解	4	1	1
	子どもの実態把握	14	3	6
	子どもの個人差への気づき	8	3	3
	家庭環境という視点への気づき	2	0	0
教育現場の理解	教育現場の理解	4	1	0
教師の仕事の理解	多忙さ・大変さ	5	0	0
	多様性	1	2	0
	教育観・専門性	0	0	1
学習指導	授業の仕方・指導法	21	5	2
	情意面の伸長	4	0	2
生徒指導	具体的な生徒指導場面における対応	2	1	0
	子どもとの接し方	14	0	6
	言語的なかかわり	7	0	1
	信頼関係づくり	1	0	2
学生の教師としての育ち	資質能力の向上	0	0	0
	自己の振り返り	7	1	1
	将来展望	3	0	0

※サンプルサイズは、学生 88 である。

(3) 構造モデルの生成

ここでは、抽出した7つの教育的価値の間の相互関係を検討し、それを示す構造モデルを生成した。具体的には、複数のカテゴリー間のかかわりに触れた回答を抽出し、それを一つの根拠としながら、筆者の経験に基づいて構造化した（図1）。

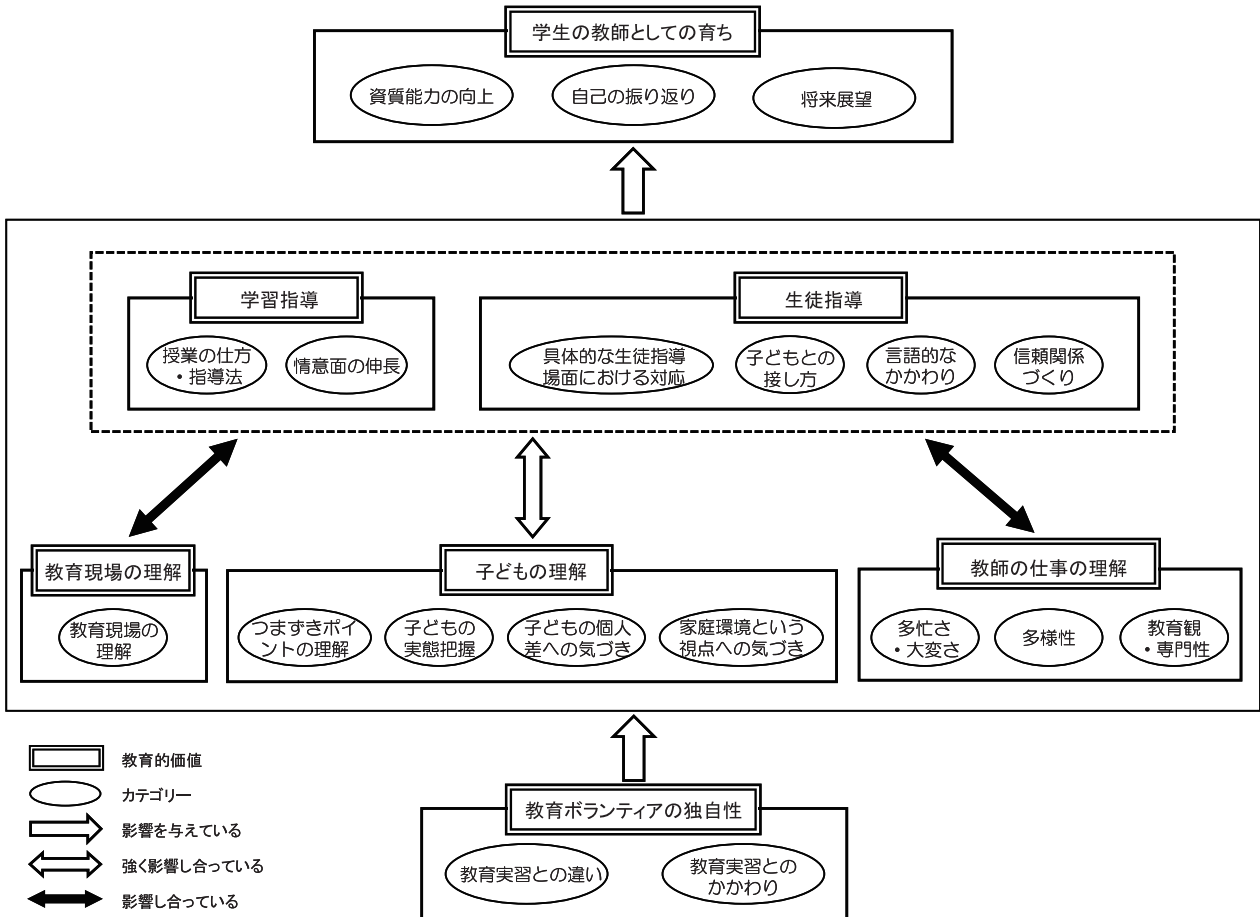
まず、【教育ボランティアの独自性】が、教育現場の全体像を客観視できることのベースにある。「教員を目指す学生にとっては、教育実習とも違う評価を伴わない活動であるので、…〈略〉…、生徒の生の声を聞く良い機会であると思う（受）」「教育実習と異なり、長期にわたり定期的に入ること、学校現場の動きや児童生徒の生の姿に触れることができる（受）」というように、ゆとりと適度な距離感をもてること、長期的・定期的に教育現場にかかわれることによって、子どもや教師の仕事を理解したり、様々な指導について考たりできるのである。

次に、理解に関する【子どもの理解】【教育現場の理解】【教師の仕事の理解】の3つの価値と指導に関する【学習指導】【生徒指導】の2つの価値の関連については、どちらかが先で、どちらかが後というような順序性はなく、相互に影響しあっており、双方向性があると考えられる。様々な実態を理解して、それらを踏まえて指導するだけとは限らず、指導することを通して子どもの実態などを理解するという面があるのも当然である。「中学の生の授業が見られるので、先生がどういことをすると生徒がどんな反応するのがよくわかる（学）」「その子がどこまでの知識を持っていて

どこまで理解できているのかなど、考える必要があるということ学びました（学）」などは、この点を言い表している回答例であろう。また、表5の度数からも推測できるように、中でも指導に直接結びつく【子どもの理解】と指導に関する2つの価値との関連は特に強いと言えるだろう。

さらに、「現場の課題を知り、それを解決するための手立てを考えることが大きな学びになりました（学）」という回答に見られるように、これらの理解と指導に関する5つの価値は、トータルとして【学生の教師としての育ち】に影響を与えているものと考えられる。

図1 学生にとっての教育的価値の構造モデル



2 受入先にとっての教育的価値

(1) 抽出したカテゴリーの説明

教育ボランティア活動の受入先にとっての教育的価値を明らかにするため、受入先にとっての教育的価値に関する回答をKJ法によって分類した結果、10のカテゴリーが得られ、それらを4つの教育的価値に整理した。表7には、その結果を示した。なお、カテゴリー名の後の()内数字は、当該カテゴリーに含まれる回答数を表すものとする。

以下、4つの教育的価値と各カテゴリーについて説明する。各カテゴリー説明の最後には代表的な回答例を「 」内に示した。

表7 教育ボランティア活動の受入先にとっての教育的価値

カテゴリーの内容説明	受入先にとっての教育的価値	
教育現場における人員不足が解消できる。	人員増加 (8)	教育ボランティアの独自性
教職員よりも年齢が近いことによって上下関係でないかわりかかわりがもてたり、若さによる情熱ある指導ができたりする。	若さ (3)	
教職員以外の大人と触れ合う機会がもてる。担任とは違った存在としてかかわることの効果が期待できる。	教員以外の存在 (3)	
定期的にも子どもにかかわることで、子どもは自分のために来てくれるという感覚をもつことができる。	定期的 (1)	
個別指導など個に応じたきめ細かい指導が可能となる。習熟度別指導や小グループ指導など指導形態の多様化が図れる。	きめ細かな学習指導 (12)	子どもにとっての効果
生活面のアドバイスをもらうことで、子どものソーシャル・スキルが向上する。学生と交流することで、学校生活を楽しく過ごすことができる。	生活面の向上・情緒面の安定 (6)	
教職を目指す学生の姿に教職員が刺激を受けたり、授業改善や開かれた授業が行われたりする。	教職員の自省 (3)	教職員にとっての効果
学生の多角的な視点や新鮮な感覚を指導に取り入れることができる。	多角的な視点の導入 (2)	学校（組織）にとっての効果
様々な活動を推進したり、活動の範囲を広げたり、活動内容の充実を図ったりできる。	活動の幅の広がり (3)	
学生の熱意や頑張りで活動が活性化する。	活動の活性化 (3)	

【教育ボランティアの独自性】

〔人員増加〕〔若さ〕〔教員以外の存在〕〔定期的〕といった、教育ボランティア活動がもつ独自の性格にかかわる価値をまとめて、【教育ボランティアの独自性】とした。

〔人員増加〕：子どもに対する個別指導を行いたくても、人員がいなくて実現できないという教育現場の悩みを、教育ボランティアを活用することで解消できるのである。

「職員が個別に勉強を教える時間が取ることが難しいので、学生さんが来ていただくと学習をみてもらえ、子ども達にとって有意義な時間が過ごせる」

〔若さ〕：子どもは、年齢が近い学生に気軽に話しかけることができ、教師と子どもとは異なる人間関係をつくることのできる。また、若さがもつ情熱や卒業生の頑張る姿を見せることの効果にも期待している。

「学生は、教職員よりも児童生徒と年齢が近いことによる教育効果…上下関係でなく、斜めの関係での児童生徒への関わりが期待できる」

〔教員以外の存在〕：教職員だけでなく、地域や保護者など違った立場から子どもを指導することの大切さが言われている。学生に対しても、教職員以外の存在として子どもにかかわることによって生じる教育的効果が期待されている。また、学生のもっている専門的知識や技能への期待に言及する回答もある。

「子どもたちにとって、学校の児童と職員等以外の大人とのふれあいが図れる」

〔定期的〕：教育ボランティア活動は、比較的長期にわたる定期的な活動となるので、子どもが、学生の訪問を心待ちにすることも多い。特に、児童養護施設での活動では、学生と子どもの1対1の対応が多いことから、自分が大切にされているという気持ちが芽生えていくのであろう。

「子どもは、自分のために来てもらえているという実感がもて、自分がいろいろな人から大事にされているという感覚がもてる」

【子どもにとっての効果】

〔きめ細かな学習指導〕〔生活面の向上・情緒面の安定〕といった、受益の対象を子どもとしたものをまとめて、【子どもにとっての効果】とした。

〔きめ細かな学習指導〕：指導する人数が増えることで支援がいきわたり、きめ細かな指導が可能になるというだけでなく、子どもにとっては、学生であるという気軽さから、自分の考えや質問を言いやすくなるという面もある。また、様々な指導形態を活用することも可能となる。

「児童・生徒へのきめ細かな指導を可能とし、学力の向上や指導の充実が図れる」「教科内容の必要性や担任の意向によって、個別指導や習熟度別指導及びグループ指導等を仕組み、その指導者として入っていただける」

〔生活面の向上・情緒面の安定〕：ソーシャル・スキルが不足している子どもに対しては、細かく丁寧な指導を繰り返し行うことが必要になる。ボランティア学生からの子どもに対するアドバイスがそうした指導の一助となる場合もある。また、休み時間などでの交流を通して、心を通わせ合い、楽しく学校生活を送ったり、学生に褒められることで、自分に自信をもてたりといった情意面の効果もある。

「余暇支援、学習支援、行動支援、相談支援などの教育ボランティアによる援助を通して、…〈略〉…、対人スキルや社会生活スキルの向上につながる」「学生が休み時間に全校児童との交流を深めてくれることにより、児童が学校生活を楽しく過ごすことができるきっかけとなった」

【教職員にとっての効果】

〔教職員の自省〕：最初、教師はボランティア学生に授業を観察されることに抵抗を感じる。しかし、ティーム・ティーチングなどで協力して授業を行ったり、学生にアドバイスを与えたりすることを通して、抵抗感は少なくなり、開かれた授業を行うようになる。また、教職を目指す学生に、いい加減な授業は見せられないという意識が働き、授業をよりよいものに改善していこうとするのである。受益の対象が教職員ということで、単独の価値とした。

「教師を目指そうとする学生に対し、現職教員が刺激を受けたり、アドバイスをおくったりすることにより、授業改善に役立つ」

【学校（組織）にとっての効果】

〔多角的な視点の導入〕〔活動の幅の広がり〕〔活動の活性化〕といった、受益の対象を組織体としての受入先としたものをまとめて、【学校（組織）にとっての効果】とした。

〔多角的な視点の導入〕：担任以外の指導者が加わることで、より広い視野に立って指導にあたることができるとともに、既成概念にとらわれない新鮮な感覚を取り入れることができる。さらに発展して、よりよい学校風土づくりに寄与するという回答もある。

「学生の多角的な視点・新鮮な感覚を保育の中に取り入れることができる」

〔活動の幅の広がり〕：学習活動や学校行事において、ボランティア学生を活用することで、新たな取組を構築できたり、それまであった取組の内容の充実を図れたり、活動範囲を広げられたりできるようになるのである。

「学習活動や学校行事において、内容の充実を図ることができる」

〔活動の活性化〕：若く熱意のある学生が教育現場に入ると、その熱意は子どもや教職員に伝わり、活動が活性化していくのである。

「学生ボランティアにきていただくことで、生徒は一層意欲的に学習に取り組んだり、部活動を頑張ったりと、活動を活性化することにつながる」

(2) 構造モデルの生成

ここでは、Ⅲ-1-(3)と同様にして、抽出した4つの教育的価値の間の相互関係を、カテゴリーレベルで検討し、それを示す構造モデルを生成した(図2)。

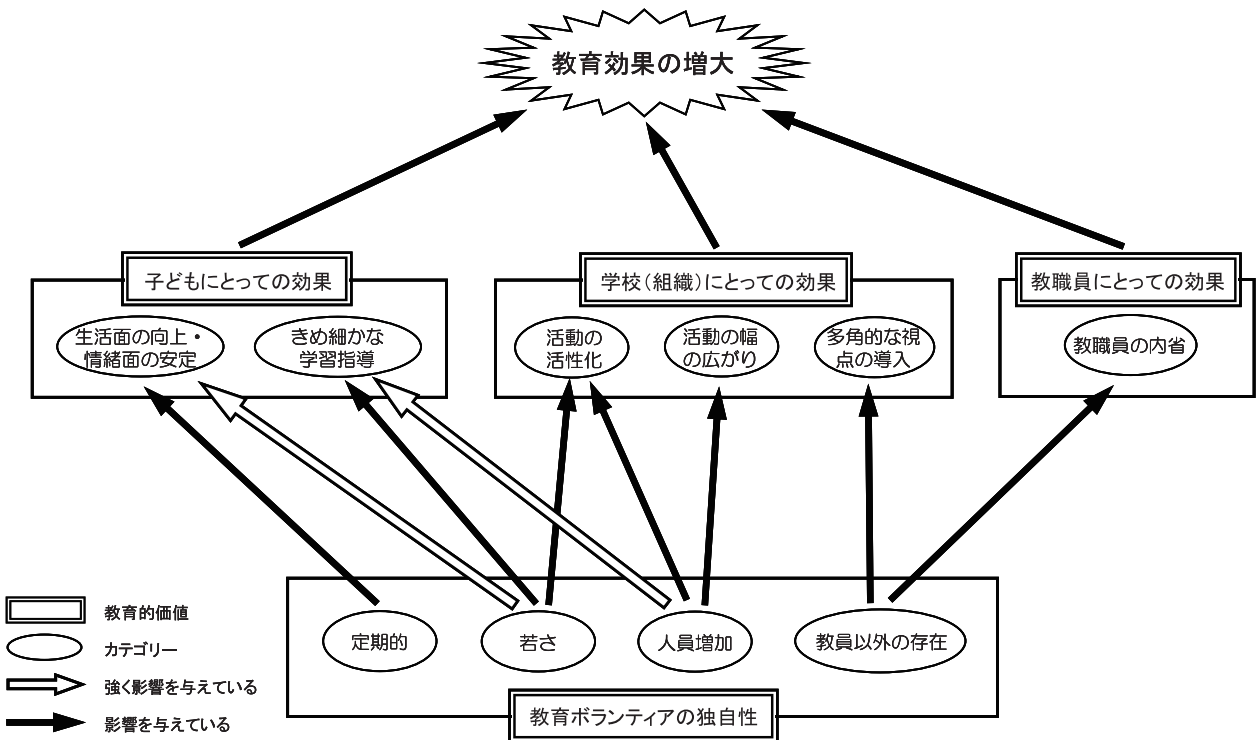
【教育ボランティアの独自性】が、【子どもにとっての効果】【教職員にとっての効果】【学校(組織)にとっての効果】の全てに影響を与えていると推察できる。

例えば、「学習指導を行う際に個別の指導を必要とする児童が多く、できるだけ多くの教師が当たればいいのですが、なかなか難しい現状があります。学生さんに少しでも補助をしていただくことで困っている子の助けになります」は〔人員増加〕が、「学習でつまづいているところやわからないままになってしまっているところを、生徒たちは、より年齢の近い大学生のチューターに気軽に質問し個別指導で教えてもらうことができ、学力の向上に役立っている」は〔若さ〕が、それぞれ【子どもにとっての効果】に影響を与えていることを表している。

また、「教育ボランティアの受け入れを通し、担任学年教師も生徒の新たな一面が発見できた」は、〔教員以外の存在〕が【教職員にとっての効果】に、「学生の若い力が、学校現場の活性化にもつながる」は、〔若さ〕が【学校(組織)にとっての効果】にそれぞれ影響を与えていることを表している。中でも、学びの主体である子どもに大きな影響を与えているのは、〔人員増加〕と〔若さ〕である。

そして、【子どもにとっての効果】【教職員にとっての効果】【学校(組織)にとっての効果】が一体となって『教育効果の増大』に結びついていくものと考えられる。

図2 受入先にとっての教育的価値の構造モデル



IV まとめと今後の課題

本研究においては、教員志望学生が教育ボランティア活動に取り組むことの教育的価値を、「学生にとっての教育的価値」「受入先にとっての教育的価値」の二つの視点から明らかにすることを目的とした。

「学生にとっての教育的価値」は、【教育ボランティアの独自性】【子どもの理解】【教育現場の理解】【教師の仕事の理解】【学習指導】【生徒指導】【学生の教師としての育ち】の7つにまとめられることが分かった。特徴的なことは、受入先には、後輩教員を養成するという視点に立って、教育的価値を見いだしている部分があるが、学生には、その視点がほとんど存在しないということである。教育ボランティア活動に参加する学生への事前指導にあたっては、この視点に気づかせ、教育ボランティア活動が教師としての自己形成に大きな力を果たすものであるということをより一層理解させることが大切であろう。さらに、教育ボランティアの活動内容の違いは、「学生にとっての教育的価値」に対する考えに大きな影響を与えないということが明らかになった。このことから、どのような形態や内容であっても、学生にとって、教育の現場で活動する機会をもつことが、大学での理論と実践とを統合させる上で重要であると考えられる。

また、7つの教育的価値の間の相互関係を示す構造モデルの生成を通して、【教育ボランティアの独自性】が全体のベースにあること、【学習指導】【生徒指導】といった指導面と【子どもの理解】との相互の結びつきが特に強いこと、理解と指導に関する5つの価値が全体として【学生の教師としての育ち】に影響を与えていること、などが推察された。

一方、「受入先にとっての教育的価値」は、【教育ボランティアの独自性】【子どもにとっての効果】【教職員にとっての効果】【学校（組織）にとっての効果】の4つにまとめられることが分かった。カテゴリーレベルでの、4つの教育的価値の間の相互関係を示す構造モデルの生成から、【教育ボランティアの独自性】が【子どもにとっての効果】【教職員にとっての効果】【学校（組織）にとっての効果】の3つの教育的価値に影響を与えていることが示唆された。そして、これら3つの教育的価値は、一体となって『教育効果の増大』に結びついていると考えてよいであろう。

以上のような、本研究で明らかになった「教員志望学生が教育ボランティア活動に取り組むことの教育的価値」とその相互関係を、学生と受入先それぞれが、お互いの考えを意識しながら理解できたならば、より高いレベルで、この活動に参加する意識の高まりと活動の充実が期待できるであろう。

さて、本研究においては、「教育ボランティア活動の教育的価値」にかかわる自由記述質問は、受入先には「教育的価値」という直接的な表現を用いているのに対して、学生には「学んだこと・気づいたこと」という異なる表現を用いている。その違いが回答に影響を及ぼしたであろうことは否定できない。また、「学生にとっての教育的価値」「受入先にとっての教育的価値」で、【教育ボランティアの独自性】のカテゴリーが異なるという課題もあった。さらに、質問紙調査であったため、調査対象者の本音の部分を引き出すことには限界があったということも言い添えておきたい。これらに対しては、質問文のワーディングや回答形式に留意するとともに、インタビューを併用するなどして、より信頼性を高めていく必要があるだろう。

そして、今後、本研究を発展させる一つの方向性としては、本学の教育ボランティア活動の企画と運営にかかわる「教育ボランティア学生運営委員会」の委員が活動を通して、何を感じ、何を学んだのかを分析の対象として、「学生にとっての教育的価値」を別の側面から捉えて研究を進めていくことが考えられるであろう。

【引用文献】

- 文部省 1996 第15期中央教育審議会第一次答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」
- 文部省 1997 「教育改革プログラムについて」
- 文部省 1999 教育職員養成審議会第三次答申「養成と採用・研修との連携の円滑化について」
- 文部科学省 2011 中央教育審議会教員の資質能力向上特別部会「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（審議経過報告）」
- 進藤聡彦・勢田二郎・澤登義洋・角田修 2009 大学生の教育ボランティアが教育実践力の育成に及ぼす効果. 山梨大学教育実践総合センター研究紀要, 14, 139-151
- 松浦義満 2003 教員養成学部学生によるスクールボランティア活動のもつ意義と役割-教育実践教室における事例研究から-. 和歌山大学教育学部紀要, 53, 177-186
- 姫野完治 2006 学校ボランティアの活動形態による教職志望学生の学習効果. 日本教育方法学会紀要, 32, 25-36
- 原清治・芦原典子 2006 実践的教員養成のあり方に関する研究Ⅱ-スクールボランティアと教育実習の関係から-. 佛教大学教育学部論集, 17, 81-98
- 阪根健二 2006 学校ボランティア活動の実態と課題. 香川大学教育実践総合研究, 13, 15-22
- 武田明典・村瀬公胤 2009 日本における大学生スクールボランティアの動向と課題. 神田外語大学紀要, 21, 309-330
- 川喜多二郎 1967 発想法 中公新書